

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00232

研究課題名（和文）「アートを紹介した社会課題の理解」のための探求型鑑賞モデルの開発と実践研究

研究課題名（英文）Research on developing and implementing an exploratory appreciation model for 'using art to understand social issues'.

研究代表者

小川 真司（才士真司）（Saito, Shinji）

岡山大学・教育学域・特任准教授

研究者番号：40774849

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では2020年度から、大学の教養講義や地域に開かれた大学附属図書館などを活用し、本モデルの運用による「アートの鑑賞体験を市民の多角的共生社会実現のための課題理解を促す機会とするための鑑賞システムとモデルの構築」を試み、最終年度はこの実践事業を行った。この一連の研究と実践活動は、公立美術館などの文化施設や他分野・海外の研究者、企業・団体から推薦され、本モデル運用の機会を広げ、美術館や大学、学生や一般参加者など、その場所や被験者の特性が変わった場合でも、作品の背景として必要な知識の中に「社会的背景」を求める「要望」が過半数を占めることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、芸術作品の鑑賞体験を多様なものとし、「探求活動」につながるモデルを開発と検証を行ってきた。この実践は、岡山大学の複数の教養講義や、岡山や茨城の県立美術館などの展示空間、医療者教育のためのワークショップ等で行われ、本モデルによる鑑賞体験が様々な背景を持つ参加者の対話を促し、作品及び展示・提示手法が示す社会課題の理解の機会を、提供、創出しうることを導いたことには一定の評価があるといえる。加えて、本研究の「芸術作品を通して社会課題を学ぶ」という視点の重要性を、地域の文化施設と協働で提示できたことは、今後のさらなる研究の重要性を提示できたと考える。

研究成果の概要（英文）：Since FY2020, this study has attempted to "construct an appreciation system and model to make the art appreciation experience an opportunity to promote citizens' understanding of issues for realising a pluralistic and symbiotic society" through the operation of this model, utilising the university's liberal arts lectures and the university library open to the community. In the final year, this practical project was carried out. A series of research and practical activities were recommended by public museums and other cultural institutions, researchers from other fields and overseas, companies and organisations. Expanding the opportunities for the operation of this model, it became clear that even when the characteristics of the place and the subjects changed, such as museums, universities, students and general participants, the majority of the participants still "demanded" a "social background" in the knowledge required as a background to the artworks.

研究分野：実践美術

キーワード：国吉型・対話探求モデル 地域性 文化芸術資源 社会的背景 多角的共生社会 改良型国吉モデル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近代以降、グローバル化は急速に進み、世界は多様な人々が混じり合う社会となった。様々な個性を持つ市民が集い、幸せに暮らす多元的共生社会の実現は、今日の最も重要な社会課題のひとつである。社会は差異に寛容な空間を創成しなければならないが、今日の社会や個人は内向きで、異質なものを拒絶する傾向にある。わが国も多国籍化し、格差社会は現実となり多元社会はさらに進むであろう。文化の違いや地域性、経済・社会的立場の対立を調整し、様々な個人の才能を社会に還元、循環させることを可能にしなければならない。

こうした状況はアートが社会に担う役割も変化させている。ニューヨーク近代美術館(以下、MoMA)では近年、従来型の美術史的な解説を中心とした展覧会企画よりも、学際的で多文化主義的な展覧会が組成されるケースが目につく。この契機となったのは、文化的背景の違いがその要因のひとつとなった2001年の「アメリカ同時多発テロの発生」であった。移民国家であるアメリカの多様性の根拠となる様々な人種と、そのルーツにあるそれぞれの文化を内包するニューヨークで起こった惨事以降の社会の転換は、文化の発信、研究、継承を責務とするMoMAに、人種間の融和を文化理解で促す作業を課したのである。

本研究者が所属する岡山大学大学院教育学研究科国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生寄付講座(以降、国吉講座)では、20世紀前半に活躍した洋画家、国吉康雄(1889-1953)に注目し、MoMAをはじめとするアメリカの美術館で運用される、鑑賞者に探求的思考を促す美術鑑賞モデルをわが国に定着させるため、国吉とその関連作家作品を使用する「国吉型・対話探求モデル」(以下、国吉モデル)の開発を試みてきた。この試みの模索は、労働移民として渡米した国吉作品の制作背景に、近代化や世界大戦、人種や人権を巡る社会運動などへのメッセージが含まれ、国吉作品の鑑賞者は、作品を通して時代背景などに関心を示す傾向にあることへの気づきを得たことに始まっている。本研究に参加する研究者らは、国吉モデルの開発に賛同を得た、横浜市や和歌山市など全国7ヶ所の美術館と協働し、国吉康雄関連展や、行政機関などと共に芸術体験プログラムを企画し、教育機関や文化施設で実践してきた。

このように本研究者は、アート作品の制作背景にある社会学的視点や歴史的要因、制作者の文化的、思想的背景を多面的に紹介する学際的展示手法での展覧会企画と運営を通して、この研究活動を行ってきた。しかし、これらの活動は、国吉康雄という特定のアーティストと関連作家の作品に限られたものであり、また、より効果的に訴求するためには美術館での大規模な展覧会の組成が必要であったため、多様な市民に広く提供する手法としては限定的なものであった。この課題を改善し、アートの鑑賞体験を市民の多元的共生社会実現のための課題理解を促す機会とするためには、こういった鑑賞システムとモデルの構築が必要となるのか、本研究課題の核心をなす学術的「問い」であり、本研究の背景となる。

2. 研究の目的

本研究は、アートを親しむ市民に対して、社会的課題を制作背景に持つ、アート作品の鑑賞やアートプロジェクトへの参加時に、作品制作やその設置の経緯などに関する専門研究者らによる知見など、学際的な知識を有した仲介者が、関係する情報を提示しながら積極的な対話を行うことで、アートの鑑賞体験が社会課題の認知に有効であることを確かめることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、これに先行して開発された国吉モデルを、(1)熊本地震で被災した油彩画作品の修復・展示事業を通して「震災記憶と地域文化の継承」を試みる熊本県御船町のプロジェクト、(2)元ハンセン病患者が制作したアート作品を展示する国立療養所長島愛生園、(3)近代化による経済基盤の変化とその影響をアート施設の設置背景とする香川県直島のアート施設などでの鑑賞時に、応用的に導入することで、interdisciplinary(学際的)な観点から、アート作品と背景にある社会課題への探求的な思考を促す機会を、市民に向けて創出するための教育プログラムを開発し、実践することで本研究目的の達成を目指した。

2020年から開始した本研究は、コロナウイルスの影響により、当初計画した実践を中心とした手法の変更を余儀なくされた。まず、本研究の対象となる上記(1)から(3)の事業の関係団体に対して、オンラインを含めたヒアリング調査を実施した。調査では、実施状況と該当地域、支援企業などの評価等も対象とし、ここで得た知見と資料を、国吉モデルの実践メニューに組み込むことを試みた。この「改良型国吉モデル」を、(1)から(3)の事例を用いて、岡山大学の教養講義や専門講義で、教員志望学生含む受講生に対し実施し、更に岡山大学附属図書館や岡山県立美術館などで一般公募した被験者(岡山県立美術館では医療従事者)を対象にも実施した。ここで得られたデータを検証し、本研究が対象とした作品を用いた小規模美術展「And Recovering Themそして、それらを回復する」を、岡山大学に設置した特設会場で学生と市民に向け開催し、本研究による開発する鑑賞プログラムを実践した。最終年度も岡山大学と岡山市内での実践と検証を重ね、本研究を基盤とした展覧会を茨城県近代美術館で実施。来館者への取材を実施した。

4. 研究成果

本研究の目的である「アートの鑑賞体験を市民の多元的共生社会実現のための課題理解を促す機会とするためには、こういった鑑賞システムとモデルの構築が必要となるのか」に関して、国吉康雄作品での実践とは違い、(1)と(3)の事業では「地域性」を。(1)から(3)の事業全てで、

作品の制作、設置背景と共に、それぞれの運営、もしくは保全を担う事業体自体の特色に関する知見を、鑑賞プログラムの中に組み込むことの有効性が確認された。(1)のケースでは、災害発生時に加え、その復興を期に遺失する地域の文化芸術資源を維持、保全するために、「平時の備えとしての基礎研究」と「地域での顕彰活動」の重要性を、プログラムの中で訴えることになった。(2)では、ハンセン病回復者の作家、作品という「レットル」が、美術的価値の認定に際し、学術分野、市場、社会にどう作用したかを明らかにする必要と、関係者等の高齢化による「語り部」の不在が招く、「作品継承の機会の消失」の危機にある現状を取り入れ、文化芸術資源の価値判断の在り方を参加者と議論した。(3)では、現代アートと景観を融合させた事業の特性上、積極的な作品解説や作品設置の経緯の説明を行われないことを利用し、該当作品や施設と SDGs 目標とをリンクすることで、身近な社会課題として認知させることの可能性を提示した。

本研究では更に、この(1)から(3)の研究対象での実践で新たに得られた知見を組み込んだプログラムを、本研究の「社会的課題を制作背景に持つ、アート作品やアートプロジェクトを、専門研究者による知見と学際的な知識を有した仲介者が、その鑑賞時に対話を交えながら情報を提示することで、アートの鑑賞体験が社会課題の認知に有効であることを確かめる」という項目に基づいて開発に着手した。そして、この実践を広く、市民に向けて行うために組成されたのが無料美術展「And Recovering Them そして、それらを回復する」(以降、ART 展)である。

ART 展では、本研究の発端となる国吉モデル開発の契機となった、国吉康雄作品とその関連作品も比較のために合わせて展示した。ここでのヒアリングなどの結果の詳細は後述するが、多くの市民が、地域が有する「文化芸術資源」の積極的な活用を支持すると同時に、その運用が、本研究目的である「多元的共生社会実現のための課題理解を促す機会」創出のためになされることにも好意的であり、こうしたプログラムの推進のための研究、顕彰活動に対する理解も得られやすいことが判明した。このことは、ART 展が地域の公立美術館などの文化施設や他分野、海外の研究者から評価され、本研究を基盤とした美術展覧会実施の機会を、一般企業・団体の推薦と支援も受け、最終年度に地方公立美術館で本研究の検証の機会を、産官学の協働という形で得たことに繋がった。このような本研究に関わる事業の発展と発信の機会の獲得は、本研究者らにも想定外であり、本研究が社会の要請となり得る可能性を確認できた。この経緯と成果は、第46回美術科教育学会弘前大会において、「国吉型対話探求モデルの実践～大学資源と地域の文化芸術資源を基盤とした学際的展覧会の産官学による組成」として発表した。

このように様々な形式で各地域、各施設で実施された本研究をもとにした活動は、国吉モデルの検証と改良を経て発展した「芸術体験を創造性と批判的思考法に繋げるプログラム」として検証を重ね、この有効性は2021年のART 展及び、最終年度となる2023年に、茨城県近代美術館で開催した展覧会企画で確認できたと考える。これらの詳細は後述するが、右の図-1に示すような対話と探究を繰り返す鑑賞プログラムの開発と導入により、美術館などの文化施設や、大学生、一般参加者など、実施する場所や被験者の性質が異なる場合であっても、本研究が対象とした作家や作品、アートプロジェクトなどの理解に必要な情報として、「社会的背景」を求め

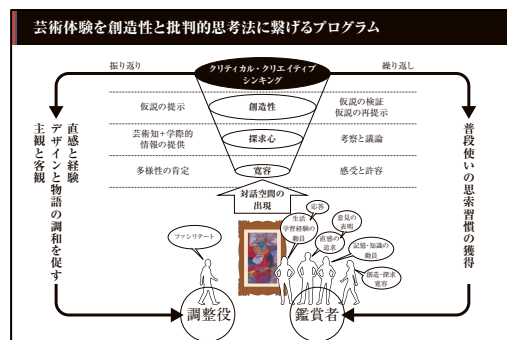


図-1

る要望が多くを占めたことは発見であった。この結果は、今後の研究を進める上での重要な示唆となった。本研究のような「作品を通して社会課題を学ぶ」という視点での、芸術文化資源へのアプローチに関する研究の推進とその発信の重要性が確認できたと考えられるからだ。しかし、必要な社会課題の種類や項目の分類は現時点では未着手であり、課題といえる。今後、情報の整理とそれを精査することで、開発プログラムが一般的に使用可能になると想定されるため、この実践と学内機関や研究者との学際的で幅広い意見交換の機会を、今後も設けたいと考える。

以下、各プロジェクトの詳細

国吉モデルの応用実施

本研究では、これまでに岡山大学や岡山県立美術館でも導入され、現在もその実践が続く VTS (Visual Thinking Strategy) など、「作品解説やその制作背景の説明を行わない」ことを推奨したモデルを、①プログラムの導入部に利用し(右図-2の芸術領域)、②対話と多様性理解の重要性を考察(同・社会領域)した後、③「探求」に繋がる国吉モデルを使用した、教育プログラムを開発(物語・探究領域)、提供してきた。このプログラムを通して、学生や市民に対し、社会課題の理解を促す機会を創出し得ることと、その有効性に対する一定の評価が、その期待と共になされたと考える。これは、岡山大

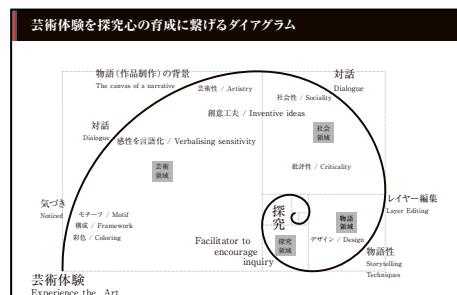


図-2

学附属中央図書館(2021年)や、5D Lab Media Gallery(2023年)などで、本研究に則った形での作品、資料解説を含む、学内文化資源の展示計画を、新規もしくは継続的に実施していることに加え、教育学部の専門科目で全学部生が受講可能な一般教養講義「アートとコミュニケーション」でのアンケートで本研究の導入後、4点以上(5点満点)であることや、医学部開講講義での実践継続依頼からも窺える。

「And Recovering Them そして、それらを回復する展」(2021年)の実施とその調査

ART展(2021年12月5日~26日)では、岡山大学創立五十周年記念館と同附属中央図書館に会場を特設し、本研究者が展示計画と関連する教育プログラムを担当した。展示作品は、本研究で扱う以下の(1)から(3)のプロジェクトに関連する作品とした。

- (1) 熊本地震で被災した田中憲一作品とその修復事業に関するパネルを展示。
- (2) 国立療養所長島愛生園で展示される機会のない大型油彩画作品の展示。
- (3) 島へのアート作品導入の背景を知るため、豊島事件(産業廃棄物不法投棄事件)に関する写真(廃棄物を実寸代に引き伸ばした)を展示。関連する作品として香川県直島の家プロジェクトに常設展示される千住博作品の同シリーズ作品を展示。

展示構成は、本研究により開発された教育プログラムを会場内で実施することを前提に設計した。岡山、香川、熊本、和歌山、ニューヨークから提供された作品や、関連するアートプロジェクトの概要を、学問領域を横断する情報で提供する解説パネルや映像資料と組み合わせることで、これらをSDGsや地域課題(人権、環境、地域コミュニティ、災害復興など)とリンクすることで、社会課題を芸術資源の活用から啓発する「場」として組成した。コロナ禍での開催であったことから会期も限定し、WEB上でも発信し、地域と世界に本研究で主題とした課題を共有した。会場では、事前に本研究の進行状況と、改良型の国吉モデルを実践するための展示情報の研修(図-3)を受けたナビゲーターを会場に常時配置することで、来場者に国吉モデルを応用した本研究による鑑賞プログラムを随時実施し、参加した学生、市民が多様な視点での作品鑑賞と社会課題へアプローチする機会を提供することができた。同様のプログラムは、オンラインでも参加者を公募し、岡山大生4名と岡山県内外の社会人8名に対してこれを実施した。

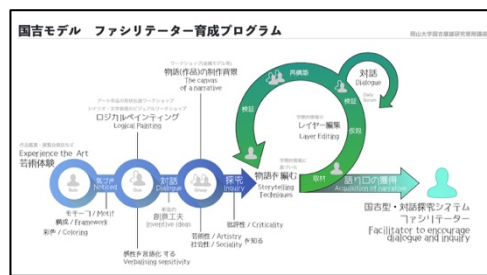


図-3

本展の開催により、「アートの鑑賞体験を市民の多元的共生社会実現のための課題理解を促す機会とするためには、こういった鑑賞システムとモデルの構築が必要となるのか」という問いに対して、本研究の有用性が確認された。プログラム参加者からの評価は高く、全参加者から「作品に対する意識の変化があった」という回答を得た。寄せられたコメントを一部抜粋し、記載する。

- (1) 自分とは全く違う意見を「無下にしない、知ったかぶりしない、でも鵜呑みにもしない」という適度なバランスをとらなければならない場面は、芸術鑑賞だけでなく、これから社会人として歩いていく上でも大切になってくるスキルだと思うし、絵を媒体に実践したこの活動は、大きな学びの機会であった。
- (2) 美術史や色彩についての知識は今もあまりないけれど、画家について少しの背景知識があるだけで、絵を手がかりにその画家の心理的・哲学的な部分を見ようとする姿勢が変わる。「背景知識を頼りに、目の前の絵に自分なりの仮説を投影できるようになった」からだと思う。
- (3) 興味本位で申し込みましたが絵の見方が変わり、沢山の面白い人たち(他のプログラム参加者)に出会え、自分の幅が少し広がった。参加できて良かった。
- (4)

この体験プログラムの結果から、「アートの鑑賞体験が社会課題の認知に有効であること」を見出すことができた。会場内で実施したヒアリングとアンケート(有効回答数 225 枚)の結果、「面白かった」が 38.4%。「勉強になった」が 34.2%。「感動した」が 15.1%となった。回答者の属性は、来場者の 37.3%が 10 代(高校生と大学生)、17.3%が 20 代と、その半数が若者世代である。これは大学内での開催が影響しているが、地域からの来場者も多数見られ、老若男女を問わない参加があった。男女比は男性 51.4%、女性 45.9%である。

「And Recovering Them そして、それらを回復する展」の成果を受けて

「ART展」の結果から、本研究の方向性を確認することはできたが、コロナ禍での実施もあり、作品、作家の情報やプログラム体験者へのフォローが限定的で十分ではなかった。このことを踏まえ、2022年度は、「平成28年熊本地震」で被災した油彩画作品の修復プロジェクトを担う「田中憲一の画を救う会」による企画展示「被災/レスキュー」(熊本県立美術館分館 / 2023年)、(2) 長島愛生園歴史館に収蔵される元ハンセン病患者が制作した絵画作品調査のため関係者との面談、(3) 近代化の影響をその設置背景とする香川県の離島のアート施設に赴き、取材、再調

査を行った。また同時に、本研究の検証のため、岡山大学中央図書館内を会場に、長島愛生園で生涯を過ごした洋画家、清志初男の油彩画作品とハンセン病問題に関する資料を、長島愛生園から借用し、関連図書を学生有志と共に選書した資料・書籍と共に展示した。この選書の際も、本研究による知見を提供するプログラムを実施した。2022年6月3日に、この展示に関する鑑賞調査を、岡山大学の12学部148名にオンライン形式で実施した。結果、8割を超える学生に作品鑑賞に対する「意識の変化」が見られた。特に、「絵画とその背景への理解が深まり、プログラム実施前後で作品への印象・理解に変化があった」という回答は75%となった。この傾向は、ニューヨーク市立大学の山村みどり准教授(ニューヨーク近代美術館講師兼務)を招聘し、直島のベネッセハウスミュージアムと家プロジェクトを対象に実施した対面での検証(岡山大学の9学部19名の学生が参加/2023年1月14日)や、医療従事者10名を対象とした、岡山県立美術館の特別企画展「名古屋市美術館コレクション展」(2023年2月25日)でも確認された。

海外での評価(2022年)

本研究の2022年までの調査及び研究実績をまとめ、学際的で多文化主義的な展覧会を実施するMoMAを、その教育プログラムの取材と、本研究に関する意見交換を行うために訪問した。同館のソーシャルエンゲージメント部門担当のアシスタントディレクター、サラ・ケネディは、「MoMAの方針も本研究の示す『問い』と同じ考え方だ」と言及したが、この「同じ」について、ケネディは、「MoMAも、伝統的には知識を観客に対して共有する展示・解説手法を採用していた。しかし現在、美術館に訪問する客層の幅を広げる必要があり、来館者を第一に考えた場合、様々な方法でアプローチしていく必要があると感じている」とし、「例えばアーティストたちを、より広い文脈で紹介することを実践しており、このことが来館者の作品に興味を持つきっかけになるとも考えている」と加えた。MoMAが重視したのは、美術館に対してこれまで興味を示さなかった市民を、どのようにMoMAに迎え入れるかであった。その方法のひとつとして、「単純に楽しいものを提供するわけではなく、作品と関連する教育プログラムが、社会に対話を促す起爆剤になると考え、美術館を考えるためのツールボックスとして提供することを社会に対する役目と考えている」とし、だからこそ、本研究を通して「社会を考えるきっかけ」とするという意見に「賛同する」と続けた。再度MoMAを訪問した際、MoMAの素描・描画部門の担当者によって、本研究者の活動に関する資料が、MoMAのオブジェクトリストにファイリングされた。

茨城県近代美術館「国吉康雄展 安眠を妨げる夢」での調査(2023年)

「国吉康雄展 安眠を妨げる夢」(以降、国吉展)は、2021年の「ART展」で美術品の輸送を担当したヤマト運輸株式会社が、ART展と本研究によるプログラムを高く評価したことで、国吉展の実施を決めた茨城県近代美術館との間を仲介し、展覧会の企画と監修を本研究者が務め、最新の国吉康雄研究を、本研究を基盤とした学際的構成と解説とで展覧会場を設計する、産官学による連携事業として実施された。

国吉展は、展覧会の組成に関わる各団体が、これまでの本研究から、本研究で取り上げる作品や関連するプロジェクトが、現代の社会課題を「思考させる」知財となることを確認した上で、事業組成が始まった。この作業では、本研究を、教育現場などに訴求する理論構築とその利活用を促すコンテンツを開発、提供することを目的のひとつに設定。本研究のテーマでもある「アート鑑賞体験を市民の多角的共生社会実現のための課題理解を促す機会とする」美術展覧会として企画される。国吉展は、本研究の研究代表者である才士が、本研究の総括発表も含めた展示計画を発案し、2023年10月24日～12月24日の会期で開催に至った。

本研究の発表展示では、本研究が対象とする(1)から(3)の作品、関連プロジェクトの全てを紹介する区画を、国吉展の展示動線上に特設展示として設置し、無料で公開した。展示区画では、本研究に関する資料やパネルを展示に合わせ、改良型国吉モデルの体験空間を設計し、国吉展示室での鑑賞体験を充実したものとするため、アメリカでの調査結果や社会的背景を紹介し、これまでの国吉康雄展でも紹介された、美術史の流れに沿った紹介と共に、作品内で扱ったモチーフに関する社会的考察なども掲示した。

ヒアリングの結果

本展会期中に、国吉講座の講師陣及び学生が、来館者に対してヒアリング調査を実施し、130名から回答を得ることができた。回答者の属性は、「美術館・博物館には年にどの程度行かれるでしょうか」という問いに対し、「年に3回」と「年に6回」がともに13名ずつあったが、「ほとんど行かない」から「月に1、2回」までが他多数を占めた。ここには会場となる茨城県近代美術館への訪問が初めてとなる来館者も含まれる。「美術館などで絵画を鑑賞する際に、作品と解説文を読む比率はどの程度か」という質問では、「絵画を見る時間が長い」が40%(52人)。「解説文を読む時間が長い」が44%(57人)。「どちらも同じくらい」が11.1%(14人)となり、「解説文は読まない」は4%(5人)だった。「絵画作品を鑑賞するとき、作家や作品についての知識が必要だと思いますか」では、「必要」が53%(69人)と半数を超え、「鑑賞した後に必要」が18%(23人)。「必要ない、作品は自分で考えるべきだ」が合わせて10%(13人)となった。このうち、「どんな知識が必要か?」という質問には「作家が生きた時代の社会背景」とする回答が67%(87人)となるなど、知的探求に意欲を示す結果が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 伊藤 駿	4. 巻 178
2. 論文標題 国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生寄付講座 第2期活動実践報告とその考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	6. 最初と最後の頁 81～101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/bgeou/63020	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩井希久子、岩井貴愛、井上正敏、渡辺秀和、藤木洋介、才土真司、伊藤駿	4. 巻 -
2. 論文標題 2016年熊本地震から救出された“町の宝”御船町田中憲一作品の保存修復活動	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化財保存修復学会 第42回大会 研究発表集	6. 最初と最後の頁 312頁と315頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 才土真司
2. 発表標題 SNS社会とコロナ禍に「みるを分かち合う」こと 絵画表現・ジブリ作品とその後のアニメーション表現から
3. 学会等名 第31回日本形成外科学会基礎学術集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 才土真司、伊藤駿
2. 発表標題 地域社会が新たに求める文化芸術資源の運用モデルについて-洋画家・国吉康雄作品とその基礎研究の市民への還元を目的とした参加型アートイベントと学際的展覧会等の組成-
3. 学会等名 美術科教育学会 第42回千葉大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 才土真司
2. 発表標題 国吉型対話探求モデルの実践 大学資源と地域の文化芸術資源を基盤とした学際的展覧会の産官学による組成
3. 学会等名 美術科教育学会 第46回弘前大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 伊藤駿
2. 発表標題 アメリカでの国吉康雄の現在地
3. 学会等名 国吉康雄展 ~安眠を妨げる夢~ 福武コレクション・岡山県立美術館のコレクションを中心に 講演会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小川容子・松多信尚・清田哲男	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岡山大学出版会	5. 総ページ数 370
3. 書名 教育科学を考える	

1. 著者名 才土真司・伊藤駿	4. 発行年 2023年
2. 出版社 一般社団法人クニヨシパートナーズ	5. 総ページ数 102
3. 書名 DISTURBING DREAM YASUO KUNIYOSHI EXHIBITION	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	赤木 里香子 (Akagi Rikako) (40211693)	岡山大学・教育学域・教授 (15301)	
研究分担者	田村 朋久 (Tamura Tomohisa) (00836637)	大手前大学・総合文化学部・非常勤講師 (34503)	
研究分担者	伊藤 駿 (Ito Shun) (30839022)	岡山大学・教育学域・特任助教 (15301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関